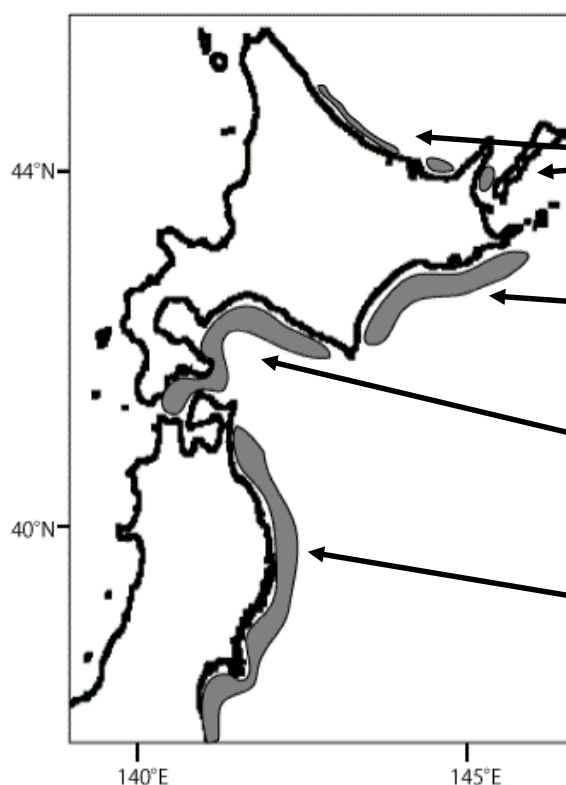


平成26年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成26年10月～12月)のポイント



常磐以北太平洋海域の来遊量は、概ね前年を下回る。なお、海域別の来遊量および魚体の大きさは以下の通り。

根室海峡～オホーツク海：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並み。

道東太平洋周辺海域：
来遊量は前年並み。
魚体は前年並み。

津軽海峡～道南太平洋周辺海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年並み。

常磐～三陸周辺海域：
来遊量は前年並み。
魚体は前年並み。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 梶脇、影沼澤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

担当：塚本、大迫

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成 26 年度 第 2 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2014年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋周辺海域、根室海峡～オホーツク海、常磐～三陸周辺海域、
津軽海峡～道南太平洋周辺海域。

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網。

対象魚群：主に冬季発生系群（2014年級群）。

1. 道東太平洋周辺海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量 : 前年並み。
- (2) 漁期・漁場 : 10月まで漁場が形成される。
- (3) 魚体の大きさ : 前年並み。

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、定置網、底びき網）

- (1) 来遊量 : 前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場 : 10月～11月が漁期の中心となる。
- (3) 魚体の大きさ : 前年並み。

3. 常磐～三陸周辺海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量 : 前年並み。
- (2) 漁期・漁場 : 予報期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体の大きさ : 前年並み。

4. 津軽海峡～道南太平洋周辺海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量 : 前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場 : 予報期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体の大きさ : 前年並み。

今後の見通しおよび漁況の経過（2014年7月～8月）の説明

（1）今後の見通し

2014年8月までの漁況の経過、8月に実施された第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査の結果、そして5月～6月に実施された新規加入量調査の結果を主要な情報として、本予報期間である10月～12月の常磐以北太平洋海域への来遊量を予測した結果、概ね前年を下回ると予測される。なお、本予報期間に常磐以北太平洋海域から津軽海峡を經由して日本海へ回遊するスルメイカの来遊量も前年を下回ると予測される。津軽海峡經由で日本海へ回遊する時期は、海面水温が前年並みに推移していることから前年並みと予測される。

・道東太平洋周辺海域での漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。小型いか釣り船による道東主要港への7月～8月の水揚げ量およびCPUEは前年を下回ったものの（表1）、道東太平洋周辺海域における道東太平洋スルメイカ資源調査のCPUE（いか釣り機1台1時間当り漁獲尾数）は前年を上回った。また、新規加入量調査（表中層トロールネット）の結果は前年並みであった。以上のことから、本予報期間における道東太平洋周辺海域への来遊量は前年並みと予測される。近年、道東太平洋周辺海域における漁獲量は11月には大きく減少することから、主漁期は10月で終了すると予測される。魚体の大きさは、道東太平洋での調査結果から前年並みと考えられる。

・根室海峡～オホーツク海域での漁獲対象資源は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東太平洋スルメイカ資源調査における釧路以東のCPUE、7月の国後島南東の海面水温（気象庁資料）および8月までに釧路港へ水揚げした小型いか釣り船のCPUEを用いた漁獲量予測結果から、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年を下回ると予測される（北海道立総合研究機構釧路水産試験場資料）。前年は9月から漁場が形成されたが、本年のオホーツク海沿岸の表面水温は前年より高めに推移しているため、主漁期は平年と同じ10月～11月になると予測される。魚体の大きさは、釧路以東での調査結果から前年並みと考えられる。

・常磐～三陸周辺海域での漁獲対象資源は、三陸周辺海域に分布する群と道東太平洋周辺海域から南下する群が主体と考えられる。一斉調査の三陸周辺海域におけるCPUEは前年並みで、7月～8月の青森県白糠以南における小型いか釣り船のCPUEは前年を下回った（表1）。道東太平洋周辺海域の来遊量は前年並みと予測される（前述）。また、水産総合研究センターの海況予測システム（FRA-ROMS*）によると、本年は親潮の沿岸寄りの分枝が三陸近海を南下すると予測され、道東太平洋周辺海域から本海域への加入が見込まれると考えられる。以上のことから、常磐～三陸周辺海域の来遊量は前年並みと予測される。魚体の大きさは、調査結果から概ね前年並みになると考えられる。

*独立行政法人水産総合研究センターにより開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム

・津軽海峡～道南太平洋周辺海域での漁獲対象資源は、津軽海峡～道南太平洋周辺海域に分布する群と道東太平洋周辺海域からの南下群が主体と考えられる。津軽海峡周辺海域における一斉調査CPUEは前年並みで、8月の函館港における小型いか釣り船のCPUEは前年を下回った。道東太平洋周辺海域への来遊量は前年並みと予測される（前述）。また、三陸近海へ親潮の沿岸寄り分枝が南下することが予測されるため（前述）、道東太平洋周辺

海域から本海域への来遊量は少なくなることが予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋周辺海域の来遊量は前年を下回ると予測される。魚体の大きさは、調査結果から前年並みと考えられる。

(2) 調査結果

A：第2次漁場一斉調査および関連いか釣り調査

8月上旬～8月下旬に実施された第2次漁場一斉調査（北海道立総合研究機構函館水産試験場、青森県産業技術センター水産総合研究所、岩手県水産技術センター、宮城県水産技術総合センター）および道東太平洋スルメイカ資源調査（北海道立総合研究機構釧路水産試験場）の結果（図1）、道東太平洋周辺海域（42° N以北、143° E以东）の平均CPUEは20.9尾であり、前年（16.3尾）を上回った。三陸周辺海域（41° N以南、143° E以西）は2.3尾であり、前年（2.4尾）並みであった。津軽海峡～道南太平洋周辺海域（41° N以北、143° E以西）は1.8尾であり、前年（1.9尾）並みであった。調査海域全体では7.4尾で、前年（5.4尾）を上回った。

調査船調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、モードが21cmにある単峰型の組成で、前年（21cm）と同様であった。海域別に見ると、道東太平洋周辺海域はモードが21cm（前年：21cm）、三陸周辺海域は18cm～19cm（前年：18cm）、津軽海峡～道南太平洋周辺海域がモード21cm（前年：21cm）で、いずれの海域においても概ね前年と同様であった（図2）。

B：新規加入量調査

5月下旬～6月上旬に実施された常磐～三陸周辺海域および沖合域における新規加入量調査（表中層トロールネット）の結果、本予報期間に加入すると予想される外套背長5cm未満の個体の有漁調査点における幾何平均漁獲尾数（30分曳網当たり漁獲尾数）は28.7尾で、前年（24.3尾）並みであった。

(3) 近年の資源および漁獲状況

太平洋海域で漁獲されるスルメイカは、冬季発生系群が主体であり、これに秋季発生系群の一部が含まれる。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から判断すると、1970年～1980年代は低位水準で推移し、1989年から増加に転じ、それ以降は高位から中位水準で推移している（図3）。直近2年の漁獲量は2012年に減少した後（10万1,000トン）、2013年にはやや増加している（11万8,000トン）。

主漁場は常磐以北太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸周辺海域と津軽海峡～道南太平洋周辺海域、道東太平洋周辺海域、根室海峡～オホーツク海域に区別される。2013年10月～12月の常磐以北太平洋海域での漁獲量（生鮮）は6万6,500トンで、常磐～三陸周辺海域では1万9,900トン、津軽海峡～道南太平洋周辺海域では1万1,000トン、道東太平洋周辺海域では4,000トン、根室海峡～オホーツク海では3万1,600トンであった（図4）。なお、近年の漁獲量のピークは11月である。

(4) 2014年の各海域の漁況経過（7月～8月）

2014年7月～8月における太平洋沿岸の主要港での水揚げ量（生鮮：各道県の速報値等の集計による）は8,400トンで、前年同期（1万8,800トン）を下回った。道東太平洋周辺海域は2,600トンで、前年（4,900トン）を下回り、常磐～三陸海域周辺海域は4,400トンで、前年（8,400トン）を下回り、津軽海峡～道南太平洋周辺海域は1,400トンで、前年（5,500トン）を下回り、いずれの海域でも前年を下回った。各地域の詳細な漁況経過は表1に示す。

表1. 漁況経過（2014年6月～8月、一部未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	7月～8月の道東主要港（十勝港、釧路港、花咲港）における釣りによる漁獲は、1,802トン（前年比50%）で、CPUEは前年比66%であった。
北海道 道南	7月～8月の函館港における釣りによる漁獲は136トンで前年比42%、CPUEは前年比57%であった。7月の南茅部における定置網の漁獲は77トン（前年比19%）であった。7月～8月の浦河港における釣りによる漁獲は217トン（前年比24%）で、CPUEは前年比79%であった。
青森	7月～8月の大畑港における釣りによる漁獲は106トンで前年比55%、CPUEは前年比80%であった。7月～8月の白糠港、八戸港への釣りによる漁獲は、それぞれ185トン（前年比42%）、274トン（前年比29%）であった。CPUEは白糠港では前年比65%、八戸港では75%であった。7月～8月の八戸港へのまき網による漁獲（1,921トン）は、前年（4,361トン）を下回った。
岩手	7月～8月の主要港における釣りによる漁獲は1,290トン（前年比102%）でCPUEは前年比81%であった。定置網による漁獲は314トンで前年比84%であった。
宮城	7月～8月の主要港における釣りによる漁獲は22トン（前年比41%）で、CPUEは前年比65%であった。定置網による漁獲は51トンで前年比132%であった。
福島	この期間の水揚げはなかった。
茨城	6月の主要港における沖合底びき網による漁獲は0.9トン（前年比38%）、小型底びき網による漁獲は0.6トン（前年比44%）であった。CPUEはそれぞれ前年比28%、33%であった。なお、7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
千葉	7月～8月の主要港における釣りによる漁獲（42トン）は、前年（39トン）並みで、CPUEは前年比114%であった。定置網による漁獲（4.1トン）は、前年（1.3トン）を上回った。
神奈川	7月～8月の主要2港における釣りによる漁獲は1.0トン（前年比104%）であった。
静岡	7月～8月の主要港における釣りによる漁獲は4.2トンで（前年比30%）、CPUEは前年比22%であった。
三重	7月～8月の主要港におけるまき網による漁獲は255トン（前年比4087%）で、7月の定置網による漁獲は2.0トン（前年比1559%）であった。
和歌山	7月～8月の主要港における釣りによる漁獲は15トンで前年（5トン）を上回った。
高知	7月～8月の主要3港における釣りによる漁獲（2トン）は前年（25トン）を下回った。

注：CPUEは1日1隻当たり漁獲量

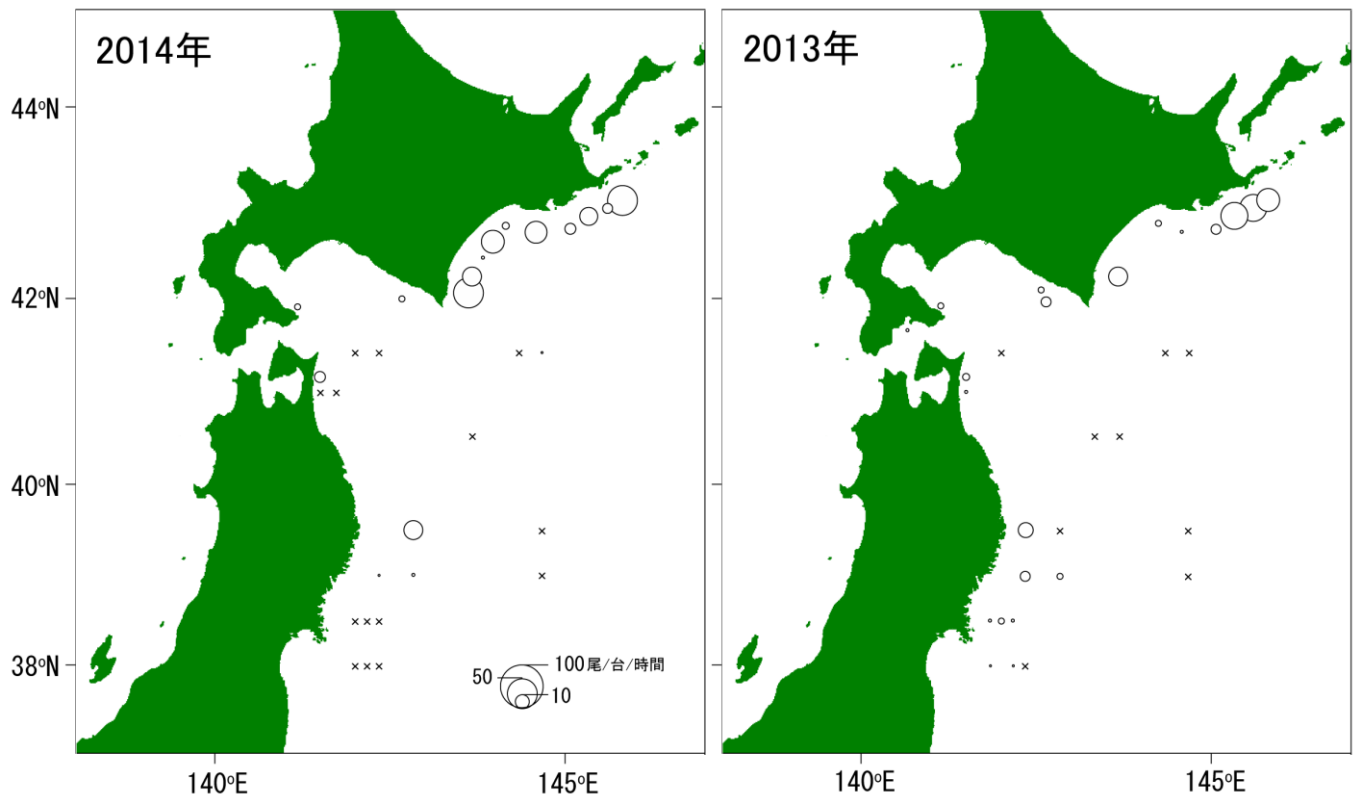


図1. 2013、2014年8月～9月の第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査におけるスルメイカのCPUE（釣機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布 ×は漁獲が無かった点

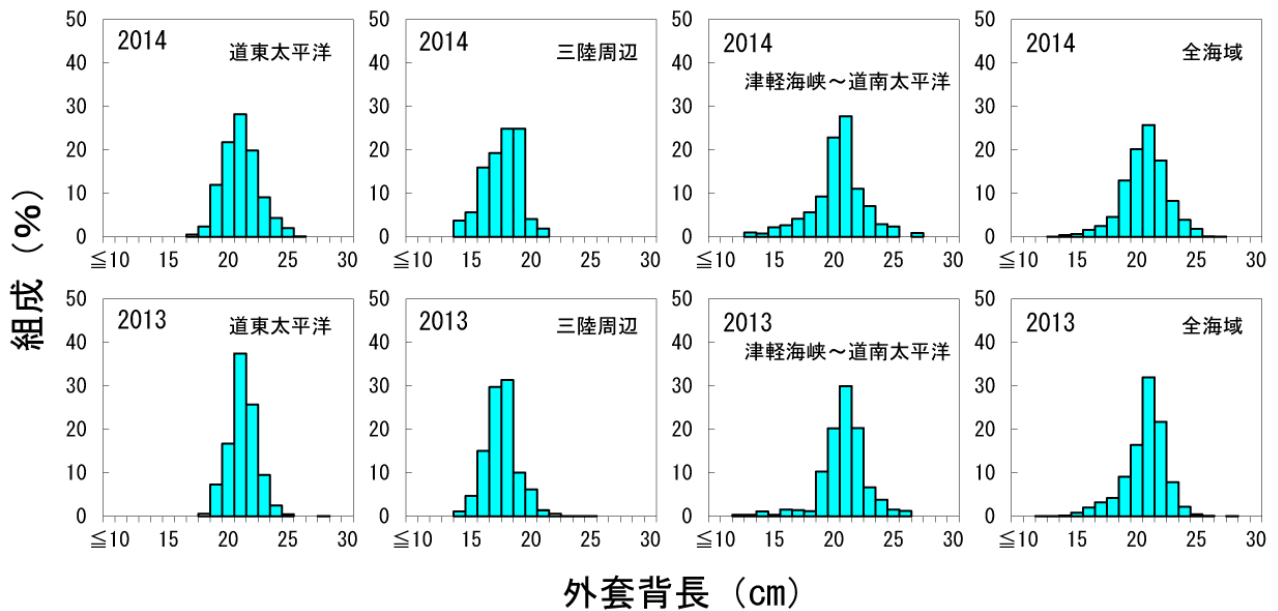


図2. 2013年と2014年の第2次漁場一斉調査および道東太平洋スルメイカ資源調査で漁獲されたスルメイカの海域別外套背長組成

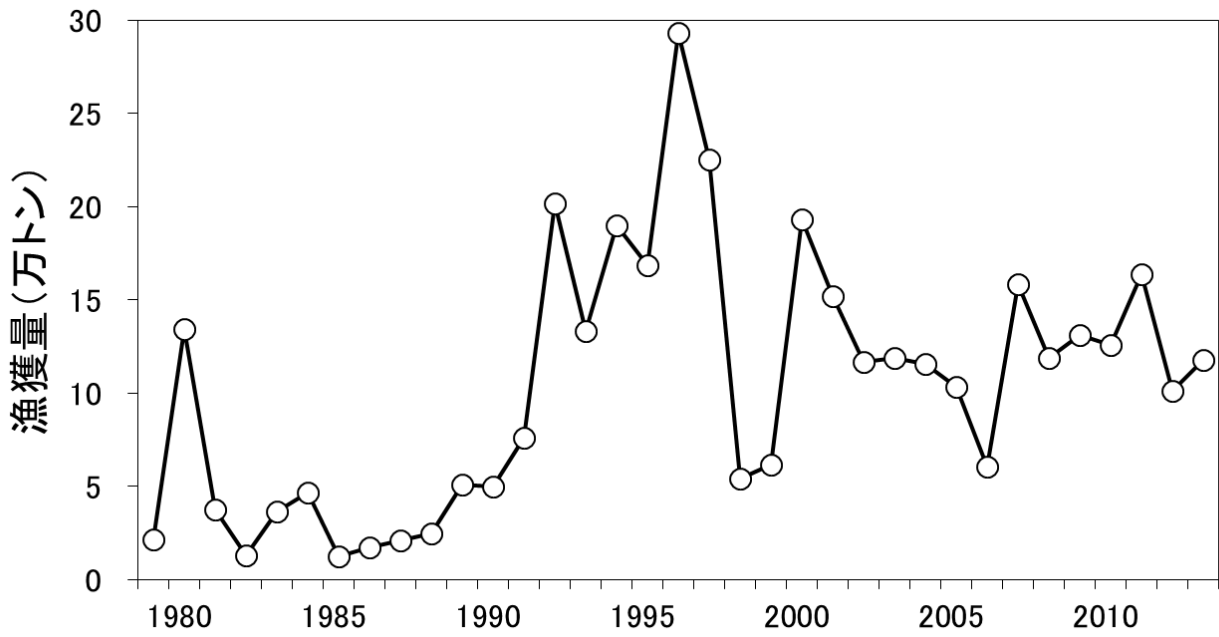


図3. 太平洋におけるスルメイカの年別漁獲量の推移
(集計値は暦年)

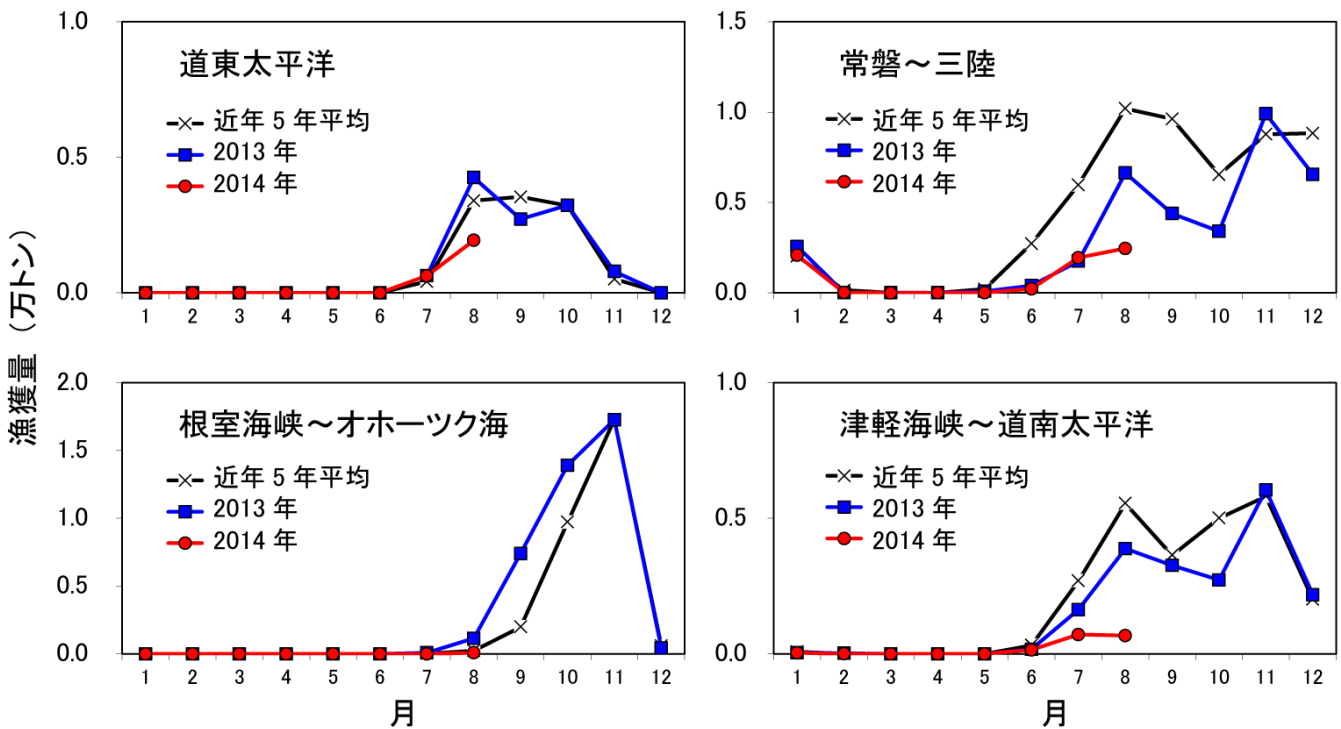


図4. スルメイカの月別海域別漁獲量 (生鮮・釣り・底びき網・定置網・まき網)
近年5年は2009年～2013年

参 画 機 関

<p>地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場</p> <p>地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所</p> <p>岩手県水産技術センター</p> <p>宮城県水産技術総合センター</p> <p>福島県水産試験場</p> <p>茨城県水産試験場</p> <p>千葉県水産総合研究センター</p> <p>神奈川県水産技術センター</p> <p>静岡県水産技術研究所</p>	<p>三重県水産研究所</p> <p>和歌山県水産試験場</p> <p>高知県水産試験場</p> <p>一般社団法人 漁業情報サービスセンター</p> <p>水産庁 増殖推進部 漁場資源課</p> <p>独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 日本海区水産研究所 中央水産研究所</p> <p>(取りまとめ機関) 独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所</p>
--	---